2012年（平成24年）
第58号
（10月15日）

平安月報

The HEIAN monthly report

発　行　所：立正佼成会　京都教会
発行責任者：渉外部長　宮地啓安
〒605-0041　京都市東山区三条蹴上
TEL (075)762-2211　FAX (075)762-2266

新宗連教団訪問　金光教泉尾教会を訪問　青年は天恩教へ

世界平和への取り組みを学ぶ

9月24日、新宗連京都府協議会は毎年恒例の公団訪問を実施した。今回の目的地は、金光教泉尾教会。一行25名は、京都駅からバスに乗り、大阪市大正区に向かった。

金光教泉尾教会に到着後、一行は教会の案内を受け、三宅教会長の講話を受けた。その後、三宅善信氏から教会の歴史や教義、平和活動への取り組みを学んだ。

特に、教会長自らが、直接信者の相談に乗る「取次」を行うため、ほとんど外に出ることはない、という話には感心させられた。

そして、太平洋戦争中に日本にとどまった米国の宣教師を助けたことから、早くから世界に目を向けられ、戦後間もなく、国際宗教同志会、世界連邦建設同盟に参加。そして、ＷＣＲＰ（世界宗教者平和会議）の設立に尽力されるなど、宗教者の立場から世界平和に向けて取り組んでこられた。

同じ新宗連のメンバーとして、金光教の取り組みにメンバーは心強いものを感じたという。

その後、大阪城天守閣を間近に見ながら昼食をとり、池田市に向かった。

1958年、安藤百福氏が生み出したインスタントラーメンの発明記念館で、一行は館内でオリジナルのカップヌードルを作って、楽しんだ。

青年たちは天恩教を訪問

10月8日、新宗連京都府協議会・青年会のメンバー10人は、京都府笠置町の天恩教を訪問した。昨年から活動を始めた青年会では2回目の教団訪問となる。

天恩教を訪問した一行を教主の弟の鉢呂金太郎氏が案内した。メンバーは教義の説明を受けた。親や先祖に感謝するとともに、神を敬い、正しい行い「真行（しんこう）」の大切さを学んだ。

「こころ　ひとつに」フェスティバル　開催

11月4日（日）に京都教会では、開祖さま生誕祭・「こころ　ひとつに」フェスティバルを開催する。実行委員会では、庭野開祖生誕を祝し、みんなが明るくなる、楽しい一日にしていこうと、吉川先生の大書「一心」が披露されるなど、パフォーマンスや模擬店などを計画している。

時間は午前９時から午後３時までの予定。会員・未会員にかかわらず、自由参加。

お知らせ（１１月の教会行事）

１１月　１日（木）朔日参り・布薩の日　9：00～
〃　夜間式典　19：00～
４日（日）庭野開祖生誕祭（※左に紹介）
……「こころ　ひとつに」フェスティバル
１０日（土）脇祖さまご命日　9：00～
大法座
１５日（木）開祖さま生誕会　9：00～
〃　夜間式典　19：00～

時事刻々

先日、日本中に久々の嬉しいニュースが駆け巡った。京都大学教授・山中伸也さんが、ノーベル医学・生理学賞の受賞が決定した。十九人目の日本人のノーベル賞だ▼山中教授は、特定の四つの遺伝子をヒトの皮膚の細胞に組み込んで「ｉＰＳ細胞」を作り出すことに世界で初めて成功したことが評価された▼受賞インタビューでの教授の言葉が印象的だった。記者会見で「感謝と責任の二つの気持ちを強く持っている」と語り、「早く研究現場に戻りたい」と語った▼謙虚さの中にも、強い決意を見せていた。礼儀正しく真摯な姿に、好感を持った人も多かっただろう▼「ｉＰＳ細胞」の発見は神の世界に入ったと言われている。素晴らしいと思う反面、恐さを感じることも禁じえない▼ある人が「こういう人だから、褒美を神さまがくれたのだ」と言った。神仏の領域を研究する人には、それにふさわしい人格者であってほしい。

原発事故に学ぶ ～希望ある未来を目指して～

参議院議員の福山哲郎氏は、福島原発事故の対応についての書籍を出版した。これには、未曾有の大事故に対して、我々が知らなかったことがらも詳細に述べられている。当時の記録としては一級品である。

福山氏が事故対応の経験を通して、どのように感じ、何を学んだのか。本紙の読者へのメッセージを寄稿していただいた。

東日本大震災から１年７ヶ月が経ちました。当時、官房副長官であった私は、被災地の救援活動、福島原発への対応、その後の被災者への支援活動等々に深く関わりました。南北約 500km にわたり大きな被害をもたらした、この大震災で、私たちは多くのことを学びました。第一に、命の大切さ、地域でのつながりや絆の重要性。第二に、地域の防災計画と防災訓練をしっかりとやること。第三に、電力の大量消費に対する反省です。

先日、私は当時の原発事故の様子を自らのノートをもとに『原発危機　官邸からの証言』という書籍を出版いたしました。原発は、ひとたび事故が起きれば人間の手では制御できず、甚大な被害が及ぶことは明らかです。これまでの原子力ムラや安全神話をつくってきたことの反省を踏まえ、今後のエネルギー政策と私たちの生き方、ライフスタイルを考え直していかなければなりません。

2030 年代のなるべく早くに脱原発を実現し、地域分散型の再生可能エネルギーを普及することで地域の雇用や経済にも貢献できるような社会をつくっていきたいと思います。レコードから CD に、固定電話から携帯電話に変わっていったように、エネルギーも希望ある未来の社会を思い描いて動けば、可能性は大きく広がり、「原発ゼロ社会」は実現すると信じています。皆様とともに安心できる未来を選択していきたいと思います。

開祖さま入寂会　～徳を偲び、精進を誓う～

10 月 4 日（木）、開祖さま入寂会が行われた。衛星放送により本部・大聖堂での式典に、全国の会員が同時に参加。京都教会では本部団参に参加した 40 名とともに、教会に 300 人ほどの会員が参集した。

最後に佐藤教会長は信者さんを大切にされていた開祖のエピソードを話した。式典に参加した会員は、慈父と仰ぐ師の徳を偲び、いただいた恩に報いるために、教えの実践を誓い合った。

京都教会での式典の模様

●合掌・礼拝

②仏性を心を育てる合掌
（いつでも、どこでも、だれにでも実践できる行法）

もともと私たちは仏と同じいのちを生き、「みんなと仲良くしたい」「人の喜ぶことをしたい」という願いを持っています。ですから、小さなことでもよいことをするとうれしい気持ちになり、また人がボランティア活動をしている姿を見ても「ああ、素晴らしい」と感動を覚えます。このうれしい気持ちや感動する心の本質が仏性にほかなりません。その仏性をお互いに認め合い、尊重し合うことが拝み合うことなのです。合掌も拝む心を表したものの一つです。

『法華経』に登場する常不軽菩薩は、どのような迫害を受けようとも、出会う人すべてを「私はあなた方を敬います。決して軽んじはしません。なぜなら、あなた方はみんな菩薩の道を行ずる人たちで、必ず仏になる人たちだからです」と礼拝し続けました。常不軽菩薩は無我の境地でその礼拝行を実践した結果、臨終の間際に悟りを開くのですが、その常不軽菩薩は一人ひとりのいのちの尊さがわかっていたからこそ合掌・礼拝行に徹して仏性を拝んでいたのです。

立正佼成会では常不軽菩薩の精神と行動に学び、会員同士が出会う時、あるいは分かれる時に合掌します。道場を訪れるお客さまに対しても同じように合掌します。仏性を礼拝することで、お互いに仏性に目覚め、自他一体の境地になろうとしているのです。合掌で迎えられたお客さまが「尊ばれているようで、なんとなくすがすがしい気持ちになる」と話しているのも、その人の仏性が拝み出されたからに違いありません。

個性も能力もそれぞれ異なる私たちですが、宇宙の根源の大生命と一体のいのちである私たち一人ひとりは本来、大いなるいのちにつながり合っています。だれもが等しく仏性を具え、いわば人間はみな平等なのです。このあたりがたいいのちをいただいた者同士が無我の心境になって合掌し相手の世界を超えた自他一体の世界が感得できます。いわば会長先生がご指導くださる、いのちが呼応し合った状態です。このことをなかなか実感できない人も、まず形から入るのがいいのです。私たちは日ごろより「よいことを心を込めて楽しくなるまで繰り返す」と教えていただいています。合掌・礼拝という形を何度も繰り返すうちに、いつしか合掌の心が自分のものとなり、それがその人の人格も高めるようになるわけです。合掌する形が仏性を拝む心を育てるのです。

今月の言葉　～常不軽菩薩さまの心で合掌礼拝～　京都教会長・佐藤益弘

校成誌 10 月号において、「みんなすばらしい」というご法話を、会長先生からいただきました。

はじめの「真理のなかで」というところの冒頭で、児童文学者の椋鳩十（むく・はとじゅう）さんのご著書『人間はすばらしい』偕成社刊の一節が紹介されています。その中から私はつぎの文章、「きみも、きみも、きみも…。なにかはわからん、ね。なにかはわからんが、みんな、〝すばらしい力〟を、ひとりひとりが持ってる」というものにふれて感銘を受けました。と同時に生かされて生きるものすべてが〝すばらしい〟と讃嘆できる人間になるために、この世に生んでいただいたのだと深く思いました。

開祖さまのご著書『仏教のいのち法華経』に、釈尊が悟りを開かれた時、次のように仰せられたとあります。「奇なるかな。奇なるかな。一切衆生ことごとくみな、如来の智慧・徳相を具有す。ただ妄想・執着あるを以ての故に証得せず」と書かれています。そのことが、とりもなおさず〝みんなすばらしい〟と釈尊が仰せになっていることであり、仏さまのものの見方であると受けとめます。それには、「優劣」「正邪」「大小」といった相対的なものの見方に偏らない、執われない心の修養が何より重要だと思います。

しかし、私は、そのことが分からないまま毎日を過ごしているなと反省するばかりです。先月、京都府と京都府宗教連盟主催の人権問題研修会に参加させて頂きました。その講師を務められた夜回り先生としてご活躍されている水谷修先生から「今朝、起きてから花が美しく咲いているのを見た人は手を上げてください！」という問いかけがありました。恥ずかしながら私は、手を上げることが出来ませんでした。人さまには、素晴らしいということを折々にお話をいたします。でも、それは人間に対して言うものの、動物や植物そして鉱物といったすべてのいのちに対しては殆どなかったのでありました。それ以後、教会へ向かう道すがらあらためて注目して歩いてみると、道沿いの朝顔の美しさや、それぞれの家の軒下にあるプランターに咲く花など、素晴らしいものがたくさん目に飛び込んできました。すべてが真理に生かされて懸命に生きていることを学び、いま、生かされ、生きることが叶っている歓びをかみしめ、互いを讃えあう生き方こそ、拝みあう生活であると強く思った次第です。

一人ひとりが、みんなすばらしい存在であると思えるならば、自ずと手をあわせることになり、合掌礼拝することとなります。その行為の基は、後段に述べられてあります「常不軽菩薩の心で」ということになるのだと思うのです。もとより昭和 20 年 10 月 13 日に、長沼妙佼脇祖さまを通じて啓示がありました。それは「愈々佼成会に久遠実成のお釈迦様を本尊として勧請せよ。来る 11 月 15 日の庭野の誕生日に勧請せよ」というものをはじめ「本会としては常不軽菩薩さまのように凡ゆる艱難と杖木瓦石にも耐えて修行し、一切のものの仏性を開顕するために礼拝を行ぜよ」という内容のものでした。このことを通して開祖さまは、立正佼成会の宗教的方向がはっきりと示されたと受けとめられ、ご生涯を通じて礼拝行に徹しられました。そういう意味で、この 10 月とともに開祖さまとのご縁が深いときに、会長先生から「常不軽菩薩の心で」とのご法話を頂くことは、最も相応しく、かつ意義あることと受けとらせて頂いております。

今月 4 日は、開祖さまが入寂された日です。いつでも、どこでも、誰にでも合掌礼拝、讃嘆をされ、その御姿をもって弟子たちに常不軽菩薩の心を教えてくださった師匠のご恩にお報いすべく、常不軽菩薩さまの心で精進させて頂きたいと思っております。

カウントダウン第６０号（その３）

12 月 15 日発行の第 60 号で丸 5 年を迎えます。この 5 年間の記事の中からピックアップして再び記事を載せます。

～第 34 号　2010 年 10 月 15 日発行より～

ARMS DOWN!　東大寺大仏殿前で国内終了イベント

署名目標数 1,000 万人突破、京都から 200 人参加

9 月 25 日、奈良・華厳宗大本山東大寺大仏殿前で、ＷＣＲＰ日本委員会主催の「ARMS DOWN!青年宗教者からの発信：キャンペーン終了式典」が行われた。

式典前にプレイベントが行われ、ステージ上で京都教会・京南支部の吉田レオさんが自作の歌を披露した。

式典では、「平和の祈り」の後、庭野理事長の挨拶などがあり、八坂憧憬同キャンペーン実行委員長（中山身語正宗青年本部長）から 1 千万人を超える署名数が報告されると、場内は大きな拍手に包まれた。

前外務大臣・民主党の岡田克也幹事長からの激励の挨拶を受けるなど、京都教会からは参加した 200 人を含み、その場に参集した一同、平和構築に向けて、引き続き努力することを確認した。

庭野開祖の宗教観・平和観　「一乗の道」

《直子夫人のこと》

庭野開祖は直子夫人のことを振り返って、「妻は、『お父さん、人さまのことさえ考えていればいいのですね』と、自分から言うようになった。『鬼になるのは簡単だけど、仏になろうというのは、なかなか容易じゃないんですね』などとも言うのである。それは、だんだんに仏の心に近づいてきた証でもあったのだろうか」と述べている。

直子夫人がこの世を去ったのは、平成6年4月13日のことであった。2月上旬、風邪をこじらせて入院加療中だったのが、12日に容態が急変した。普通なら、そのまま息を引き取る所を奇跡的に意識が回復し、庭野開祖をはじめ、駆けつけた家族のみんなに「ありがとう」と言って、笑顔を浮かべてうなずき、庭野開祖の手を握りしめた。翌13日、少しも苦しむことなく、家族に見守られて眠るように息を引きとった。

享年85歳。庭野開祖と連れ添って64年の年月を共にした。日鑛会長を喪主とした葬儀には、宗教界や政界、財界など延べ48,000人の人たちが参列して、別れを惜しんだ。喪主の挨拶で日鑛会長は、しみじみと思いを吐露した。

「母は、『三部経は私の宝物です。法華経は本当にありがたい』と、口癖のように申しておりました。どんなにつらく苦しい時であっても、母は三部経を離さず、苦境をむしろバネとして信心を深めていったのです。そして、陰日向なく、法のごとく生きる素晴らしさを、後ろ姿をもって私どもに教えてくれました。『人間、素直で正直がいちばんなんだよ』と、よく話してくれました。顧みますと母はその言葉どうりに生きた人だったと思います。

もともとが、にぎやかで、めそめそしたことが嫌いな人でした。私ども家族にとっては、つねに明るく、温かい存在でありました。普段は質素な生活を好む人でしたが、また何かにつけ人さまを招き、皆さんににぎやかに楽しんでいただくのが大好きな人でもありました。結婚以来64年間、開祖さまに連れ添い、ただひたすらに開祖さまを影から支え続け、また一方で、私ども家族を身を粉にして育ててくれた母。教えひとすじに生きることの尊さを身をもって教えてくれた母。これからは、その残してくれた心を兄弟が一つになっていつまでも大事にしていく所存です」

近年は、朝から晩まで「ありがたい」「ありがたい」と言って過ごすようになっていた直子夫人は、一人の人間として生・老・病・死のつとめを立派に果たし終えて、たくさんの人たちに見送られて旅立った。子供を立派に育て上げた母親の死に顔というものは、実に安らかだと聞いたことがあるが、直子夫人はまさにそうであった。

「諦生院妙安誠徳信女」の戒名を頂いた直子夫人は、あちらでは妙佼先生をはじめ、多くの皆さんに出迎えて頂いていることだろう。子供たちが立派に父のあとを継いでくれる姿を見届けることができて、さぞかし満足だったのではないだろうか。

《教皇を迎えて第６回世界会議》

平成６年11月、イタリアで開催される事になった第６回世界宗教者平和会議(WCRPⅥ)の開会式に、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世がご出席下さることが、正式に決定した。世界宗教者平和会議にローマ教皇が直接列席されるのは、これが初めてであった。第１回会議からそれを願いつづけてきて、第２回会議、第３回会議と開催のたびに要請し続けてきたその願いが、ついにかなったのであった。

バチカンからの正式代表の参加は第4回のナイロビ会議から得られていたのだか、教皇の会議出席はやはり無理な願いか、とメンバーが考えはじめていた時、「世界会議がイタリアで開催されることがあれば、教皇の参加も考えられる」といった情報が入ってきた。イタリアに「平和の鐘財団」(カンパーナ・ディ・カドゥーティ)という組織があり、そこの副理事長で神父のドン・シルビオ師が本会職員に語ったのがそもそもの始まりだったと聞いている。

すでに、第6回世界会議の開催地がしぼられてきていて、「いまさら変更は無理だ」という声もあった。しかし、「可能な限り最善を尽くしてみよう」と、意見が一つにまとまった。関係者の総力をあげての努力によって、第6回世界会議は、平成6年の11月3日から9日までの7日間、イタリアで開催されることが決定した。開会式はバチカン市国サンピエトロ大寺院で開き、その開会式で教皇ヨハネ・パウロ二世が特別講演をされることが決定したのである。　(つづく)

渉外部からのメッセージ

1282(弘安5)年10月13日に亡くなった日蓮聖人の遠忌法要が今月や来月に各地で行われます。今年で731回目。それほど偉大な人物であった訳ですが、日蓮聖人を慕う方や法華経を心の依りどころとする方が後世におられたからこそ遠忌法要も続いてきたと思うのです。やはりそこには法燈継承や布教があったのでしょうか。今年の開祖さま入寂会は13回目。約700年後も庭野日敬入寂会を開式させて頂きたいと思います。それには今を生きる私たちが現代にあった法燈継承や布教をすすめていく必要がありますね。

この月報はホームページでもご覧頂けます。
アドレスは http://rkk-kinki.blog.ocn.ne.jp/kyoto/